

「ただひたすらにその場に在り続ける」

「主の霊が私に臨んだ。

貧しい人に福音を告げ知らせるために主が私に油を注がれたのである。」

(聖書協会訳聖書 ルカによる福音書 4:18)

エリザベス女王が逝去されました。英国王は英国国教会（聖公会）における統治者であります。その権威が与えられる

「戴冠式」はカンタベリー大主教が司式します。戴冠式においての最も重要な場面が大主教より新国王への戴冠の場面です。戴冠式は油注ぎとも呼ばれます。

キリストの意味はギリシャ語で「油を注がれた者」という意味です。イエス様は、油を注がれてキリスト・イエスと呼ばれるのです。この「油注がれる」ことについてローワン・ウィリアムズ第104代前カンタベリー大主教が女王の逝去に際して寄せたメッセージが心に響きましたのでご紹介いたします。

「油を注がれた君主のイメージは、聖書全体に見られるもので、私たちが救い主として認めるための称号である「キリスト(Christ)」がまさにそれである。「聖別(油注ぎ)の神学」考えてみるならば、洗礼や聖職授手(叙任)における聖別(油注ぎ)は、その人に、神の民の共同体の中での新しい場所が与えられることを意味する。それは単なる職務分掌ではないし、ましてや、権力や特権のための白紙委任状ではない。それはあくまでも、神との関係、信仰共同体との関係を創り出し、その関係を生かし、より豊かなものとき

せるための恵みを約束するものに他ならない。

戴冠式はこの点で、授手式と共通している。戴冠式とは、共同体全体の生について何かしらを示し、何よりもただひたすらにその場に在り続け、共同体の理想と願望を支えるための立場に着く者を選び出すものである。司祭職とは個人の成功や功績のための職などではなく、共同体の平和と幸福のために、その立場に忠実であり続ける働きなのだということである。

そして、これこそが王の聖別(油注ぎ)において最も重要な意味なのです」

イエス様は「油を注がれて」ただひたすらにその場に在り続けてくださっています。「私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28:20)において私たちに示されています。

喜びの時、悲しみの時、苦しみの時、怒りの時、途方にくれてしまう時、どんな時も「油注がれた」イエス様はただひたすらに在り続けてくださっているのです。(司祭 越山哲也)